気候変動とペット

気温上昇が進む世界で最愛のペットの安全と健康を守るには

The Climate Reality Project
JAPAN

はじめに

気候危機は、私たちが住む世界を変えつつあります。

激しさを増す異常気象。進む海面上昇。かつてない速さで広範囲に広がる熱帯病。世界中の生態系や野生生物の生息地の多くが危機に瀕しています。

しかし、新しく迎え入れた子犬がテニスボールを追いかける様子を裏庭で見ていると、そんなことはあまり考えたくないと思ってしまっても無理はありません。

大丈夫、あなたの気持ち、分かります。

気候変動はほとんど抗いようのない問題に感じられ、少なからぬ不安をかき立てます。その影響が最も愛おしい4つ足の友だちに及ぶことを考え始めるとなおさらです。

しかし、気候危機がすでに私たちのペットに影響を及ぼしていることは決して忘れてはいけません。フィラリア症（犬糸状虫症）やライム病のようなベクター媒介性疾患、熱中症、洪水などの自然災害発生時のケガ、その他にもペットに対するさまざまなリスクが高まっています

幸い、気温上昇が進む世界でペットが安全に長く健康的な生活を送るため、少し計画的に行動すれば、私たちにできる予防的ケアは数多くあります。

問題

気候変動が進んでいる理由は意外にも単純明快です。電力や工業、輸送に必要なエネルギーを確保するための石炭・石油・天然ガスの燃焼をはじめとする人間活動により、二酸化炭素をはじめ、メタンなどの温室効果ガスが大気中に大量に放出されていることがその理由です。

これらのガスには、太陽エネルギーによる熱を閉じ込めて地表面を温める働きがあります。そのため、大気中に放出される温室効果ガスが増え続ければ温暖化はさらに進みます。それに伴い、気候は変動し、嵐は激しさを増し、夏のうだるような暑さは一層厳しくなり、海の酸性化が進み、その影響はとどまることなく続きます。

端的に言えば、気候危機を引き起こしたのは化石燃料の燃焼です。そして、実に多くの命と生活が現実の危機にさらされているのです。

動物の命も例外ではありません。

私たち人間と同じように動物たちも、最後の氷河期以降、比較的安定した気候の中で生きられるよう進化してきました。そして、過去何百万年にない速さで地球の温度が上昇し続ける中で、やはり人間と同じように動物の世界にも綻びが生じ始めています。

すでに、気温の上昇と気候の変化により、一部の野生動物の冬眠パターンが乱れていることが確認されています。

温暖な時期がどんどん長くなり、多くの地域で春に訪れていた猫の繁殖期が年中続くようになりました。悲しいことに、野良猫の増加につながっています。

自然生息地の大半、実際には生態系全体が、海面上昇、山火事、洪水・干ばつ、その他気候変動によるいくつもの影響で危険な状態にあります。オーストラリア政府はすでに、げっ歯動物「ブランブルケイ・メロミス」の絶滅を正式に認めました。海面がわずか数フィートのところにまで迫った小島ブランブルケイにある生息地の浸水が原因とされています。米国の太平洋岸北西部では、サケの群れの一部が海流の変化と水温の上昇による影響を受けています。世界各地に生息する山鳥の複数の種が標高の高い地域へと移り住んでいます。ツノメドリは、メイン湾をはじめ各地で見られる海水温の上昇により、メルルーサやニシンといった通常の食料源をなかなか見つけられず、雛の生存率が下がっています。

これらはほんの一部に過ぎません。

ここからは、気温上昇が進む世界において、家庭で飼われているペットの多くが直面する最も差し迫った問題について取り上げます。大事な家族の健康を守るために今すぐできることもあわせてご紹介します。

さあ、始めましょう！

ノミ・ダニなどの寄生虫

人間が化石燃料を燃やせば燃やすほど、二酸化炭素などの温室効果ガスが大気中に放出されます。その結果、例年より暖かい年が続き、極端な熱波や記録的な集中豪雨が発生して、昆虫や細菌、ウイルスなどの繁殖に最適な条件が整います。

これまでノミやダニは、世界の大半の地域で主に温暖な数カ月に限って発生する季節的な問題でした。しかし今では、多くの地域で春の訪れがますます早まっている一方で、かつては初雪が観測されていた時期にまで秋がじわじわと続き、温暖な期間が長くなっています。

ベクター媒介性疾患は、通常、蚊やノミ、ダニなどの寄生虫のような刺咬昆虫がベクター（媒介生物）となり伝播します。ベクターは、ウイルス、原虫、細菌など感染を引き起こす病原体を運び、ある動物から別の動物へと病気や寄生生物を伝染させます。

温暖な気候が長引いて暖冬が続くと、ノミやダニなど多くの虫の寿命と繁殖期が長くなります。結果的に、次のエサを探しながら病気を運ぶベクターが増えることになります。

問題はこれにとどまりません。温暖な気候や暖冬により、ノミやダニなどのベクターはこれまでより遠くまで移動できるようになりました。以前は気温が低くて生息に適さなかった地域にまで移動できるようになり、より多くの人々やペットがノミやダニによって運ばれてくる病気

さらに、ハリケーンや洪水など極端な気象現象が、気温の上昇とともに頻度と激しさを増しています。やがて風が収まり、水が引いた後には、瓦礫と化した家屋やがらくたが至るところに散乱したまま残されます。人間にとっては胸が張り裂けるような光景ですが、ネズミや、ネズミに寄生して一緒に運ばれてくるノミやダニにとっては、理想的な環境が生まれます。

要するに、多くの地域で寄生虫はかつてないほどに増えており、寿命も延びています。そして、これまではめったに見られなかった、あるいは全く生息していなかった場所にまで姿を現すようになっているのです。

そして、私たちの近くまで来た寄生虫はもちろん食べ物を探します。

寄生虫にとって最高の食べ物となるのは何でしょう？

ノミ・ダニ

医者じゃなくても、ノミやダニに咬まれると猫や犬に悪影響があることはご存知でしょう。ノミに咬まれると、犬も猫も皮膚炎を起こす可能性があります。さらに、ノミやダニは、人にとってもペットにとっても同じく危険なさまざまな病気を運びます。そうした病気には、ライム病、エーリキア症、アナプラズマ症、ロッキー山紅斑熱、バベシア症、ヘパトゾーン症などがありますがこれにとどまりません。

犬・猫のライム病に見られる症状

ペットを飼っている人ならご存知のとおり、犬と猫は全く性質が異なります。
しかし、ライム病に関しては、犬でも猫でも（そして他の多くの種も）見られる症状は似ています。

この危険な病気への感染が疑われる場合、次のような症状がないか確認しましょう。

- 関節の腫れや炎症
- 歩行障害
- 元気がなく活発ではない
- 食欲不振
- 跛行（場合によって、部位の移動、断続的な発生、再発がある）
- 発熱

ライムボレリア症とも言われるこの病気に犬や猫が感染すると、症状が進行して腎臓に重大な障害が生じるおそれがあり、場合によっては、致命的な腎不全を起こします。この危険な細菌性疾患への罹患が疑われる場合は、すぐに獣医の診察を受けて血液検査を行いましょう。

犬の場合も猫の場合も、ライム病の治療では通常数週間の抗生剤の投与が行われます。

蚊とフィラリア症（犬糸状虫症）

蚊は、人間にとって命に関わるさまざまな病気を媒介するだけではありません。ペットのフィラリア症を引き起こす犬糸状虫という寄生虫も媒介します。これは、非常に深刻な脅威として備えなければならない病気です。

米国食品医薬品庁（FDA）は、「フィラリア症は、重度の肺疾患、心不全、その他の臓器障害を引き起こし、主に犬、猫、フェレットなどのペットが死亡する原因となる深刻な病気である。（中略）この病気を媒介する犬糸状虫は、蚊の刺咬により伝播する」と説明しています。

そして、気候変動により蚊は全盛期を迎えています。

蚊は、温暖な気温や気象パターンの変化に乗じて行動範囲を広げ、世界中のますます多くの地域に姿を現すようになっています。気候変動がもたらす豪雨や多湿な環境により蚊が繁殖しやすくなり、個体数は増加し寿命も延びています。極端な気象現象の後には、蚊が繁殖に必要とする水たまりがあちこちにできることもあります。

これらが相まって、ペットが危険なフィラリア症に罹るリスクが高まるのも当然です。

さまざまな動物がフィラリア症に罹る可能性がある一方、家庭で飼われているペットで群を抜いて感染しやすいのが犬です。前述のとおり、この病気は感染した蚊の刺咬だけで伝播しますが、動物から動物への直接的な感染はありません（例えば猫は、フィラリア症になる可能性はありますが、犬糸状虫は通常猫の体内では成長しないため、「抵抗力を持つ」宿主と考えられています）。

フィラリア症は、南西部の砂漠地帯や西海岸の全域など、かつてはほとんど確認されていなかった地域も含め、米国50州すべてで報告されています。

では、どのような症状に気をつければよいのでしょうか？

犬がフィラリア症に感染した場合の初期症状として、軽度の咳や軽い運動で疲れやすくなることなどが挙げられます。症状が進行すると、呼吸困難や心臓の働きの低下、さらには「大静脈症候群」と呼ばれる状態に至ることがあります。これは、大量の虫体が寄生し、それが負荷となって心臓への血流が物理的に阻害され起きる症状です。

大静脈症候群は、危険を伴う手術を行ってフィラリア虫体を摘出しなければ治らない、命に関わる症状です。早期に発見できれば、獣医が処方する薬での治療は可能ですが、犬にとっても飼い主にとっても容易いことではありません。

FDAは、「治療は犬の身体に害を及ぼす可能性があり、命を脅かす肺血栓症のような重篤な合併症も起こりうる。また、繰り返し受診し、血液検査やX線検査、入院治療、

対策

予防が最善の治療法だとよく言われますが、それはペットを病気から守る上でも同じです。

ベクター媒介性疾患は、ペットと飼い主の健康にとって重大なリスクをもたらすおそれがあります。そのため、ペットを飼っている人は、ノミ・ダニやフィラリアからペットを守るための最善の予防策について獣医と相談しておくことが大切です。

特にフィラリア症は、事前に適切な措置を取っておけば簡単に防ぐことができます。

コロラド州立大学獣医学部で感染症の専門家として教鞭を執るグレッグ・D・エベル博士は、Phys.orgの取材に「月に一回、フィラリア予防薬を犬に与えない人がいるのは理解できません。頭を悩ます必要などないと思うのですが」と語っています。

ノミ・ダニ対策としては、ペットの身体をよくチェックすることが大切です。草深いところや森の中などを散歩した後はとりわけ入念に確認しましょう。お腹や尻尾の付け根などノミやダニがつきやすい部分には特に注意が必要です。

また、ノミやダニの発生を抑えるため身の回りの環境を見直しましょう。裏庭など、ペットが屋外で頻繁に動き回る場所をきちんと手入れして草が伸びないようにしておけば、効果的にノミやダニを防ぐことができます。

可能であれば、敷地をフェンスで囲って、これらの寄生虫を運んでくる可能性のある野生動物が入ってこられないようにしておくとよいでしょう。その場合、何から何まで食い止めることは当然できません。野生の鹿がフェンスの向こう側の敷地内に大好物を発見したとき、フェンスがどの程度効果を発揮するか、庭師や家庭菜園をしている人に聞いてみると分かります。それでも、病気に罹るリスクを下げることはできるはずです。

また、滴下タイプの予防薬やシャンプー、ノミやダニなどの虫を駆除し寄せ付けないようにするスプレーや首輪など、ペットの感染予防に有効な製品も多くあります。

ペットがダニに咬まれたら、一刻も早く対応することが重要です。米愛犬団体アメリカン・ケネルクラブ（AKC）によると、「ダニの摘出が早ければ早いほど、それに伴う二次的な病気に罹る確率が低くなる」とされています。

猫や他のペットにも同じことが言えます。

専用のピンセットを購入し、ダニを摘出する正しい方法を獣医に習っておくとよいでしょう。

実際には、ノミ・ダニ対策を始める前にまずは獣医に相談しましょう。獣医からアドバイスを得られれば、あなたとあなたのペットに最適な予防薬を見つけられるはずです。

そしてもちろん、これらの虫のさらなる拡がりと、それに伴う病気を長期的に抑え込むため、お住まいの地域で気候危機に立ち向かう私たちの活動に参加してください。

猛暑と勢いを増す気象現象

気候危機によって自然生態系はバランスを失いつつあり、それは時に、壊滅的な影響を及ぼしています。

このことは、私たち人間にとって何を意味するのでしょうか？　集中豪雨、洪水、熱波、ハリケーン、大寒波をもたらす「極渦」現象、干ばつなどの事象は、頻度も激しさも増しています。

では、ペットの健康との関連は？

答えは簡単です。気候変動が引き起こす極端な気象は、私たち人間に影響を及ぼすのとほぼ同じようにペットにも直接的に影響します。

デボラ・リヒテンベルク獣医学博士（VMD）は、Petfulの記事の中で「家屋の倒壊や家族の避難がペットの健康状態に影響することは間違いない。ペットは猛烈なハリケーンや暴風、洪水や火事によって迷子になったり命を落としたりする一方、住み家を失うおそれもある」と書いています。

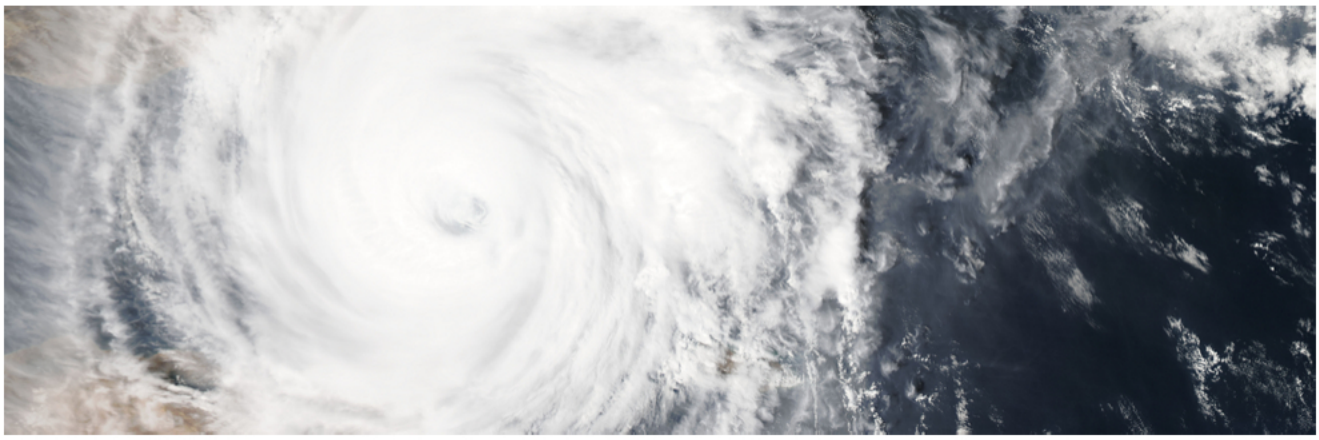
極端な気象現象は、直接的な影響として死亡を伴う痛ましい結果を動物にも人間にももたらすだけでなく、インフラを損壊し、救命医療へのアクセスに長期間支障をきたす可能性もあります。また、水質や食料供給の確保が難しくなったり、停電や通信障害など他にもさまざまな問題が起きるおそれがあります。

私たち人間がこうした影響を感じるのと同じように、犬や猫などのペットの健康と福祉にもその影響は及びうるのです。

嵐とジステンパー

すでに述べたように、多くの害虫とそれに付随する病気は、大型ハリケーンなどの極端な気象現象の後に一斉に出現する可能性があります。それに加え、嵐に伴って汚れた水が洪水となって押し寄せた後には、動物にとって細菌性疾患やウイルス性疾患に特に罹りやすい環境となります。

多くの自然災害の後にペットが最も罹りやすい病気の一つが、ジステンパーという非常に感染力の強いウイルス性の病気です。猫ジステンパー（猫汎白血球減少症とも言う）と犬ジステンパーは、名前は共通していますが、別々のウイルスによって起きる病気です。



しかしどちらも、大型ハリケーンなどの気象現象に伴って救援活動が進む中で、それらのウイルスの繁殖と拡散に最適な条件が整うことで発生します。

常識では理解しがたいかもしれませんが、救助された動物が過ごす避難所では、他の多くの動物と接近した環境に置かれ、えさや水のボウル、寝床などの用具は共有して使い、大勢のボランティアがごく短い期間にさまざまなペットに触れることになります。こうした要因がすべて組み合わさって、動物から動物へとウイルスが拡がりやすくなるのです。

残念ながら、子猫や子犬は特にジステンパーに罹りやすく危険です。

米国獣医師会（AMVA）によると、猫の場合「飼い主が最初に気付く兆候としては、元気がなくなる、食欲不振、高熱、元気がない、嘔吐、重度の下痢、鼻水、脱水症が挙げられる。発症すると、水の入ったボウルの前に長時間座っているのに、実際にはあまり飲まないということがある」とされています。

犬の場合、（すべてではないものの）一部猫と同じような症状が出ることはありますが、犬特有の症状も表れます。発症直後には、涙や目やにが出て、続いて熱、鼻水、咳、元気がない、食欲不振、嘔吐などの症状が見られます。

AMVAは、「このウイルスは神経系を攻撃するため、感染した犬には、旋回行動、頭が傾いたままの状態になる捻転斜頸、筋収縮、咬筋のチック症状（ガムを噛んでいるようなけいれん）や唾液分泌、発作、身体の一部または全身の麻痺などが見られる。また、肉球が分厚く硬化して「ハードパット」と呼ばれる症状が出ることもある」と説明しています。

猫の場合も犬の場合も、ジステンパーは通常命に関わる病気です。幸い、ワクチン接種で予防することができます（極端な気象現象の発生時や発生後にペットの安全を確保する方法については、後の章で詳述します）。

熱波と熱中症

ハリケーンや洪水ほど即時性の高いニュースとして見出しを飾ることはあまりないものの、気候変動に起因する極端な高温や熱波はますます頻発するようになり、ペットと飼い主である人間の健康を実際に脅かしています。

実際のところ、極端な高温による致死率は他のどの気象災害よりも高く、平均の年間死亡者数は、竜巻、洪水、ハリケーンよりも多くなっています。

英科学誌ネイチャー・クライメート・チェンジに掲載された研究論文には、次のように書かれています。

「現在、世界人口のおよそ30％が少なくとも年間20日間、致命的な閾値を超える気候条件（日平均の地表気温と相対湿度が致命的なレベルに達した状態）にさらされている」

またこの研究論文では、化石燃料に起因する排出が増え続ければ、2100年までに世界人口の最大74％が毎年20日以上致命的な高温にさらされる可能性があることも指摘されています。

人間においては、極端な高温により、心臓麻痺や熱中症、臓器不全などの疾患による死亡率が上昇しますが、他の多くの動物にとっても同じことが言えます。

心臓や呼吸器に持病を持つ高齢のペット、肥満の動物、長時間の運動に慣れていない動物は特に猛暑に対して脆弱です。鼻づら（マズル）が短い犬・猫の一部の種（ボクサー、パグ、シーズーなど）や、被毛の色が濃かったり量が多いペットも同様です。そして私たち人間と同じように、動物も熱中症で命を落とす可能性があります。

また、このような特徴のあるペットの場合、気温と湿度が極端に高い環境ではただでさえ呼吸をするのが難しいと考えられます。

湿度に注意することは非常に大切です。犬をはじめとする多くの動物は、人間のように皮膚から汗をかくことはできません。その代わりに、パンティング（口を開いて浅く速く呼吸をすること）によって体内の熱を逃がして体温を下げます。しかし、湿度が極端に高い環境では、パンティングによって熱を十分に逃がすことができず、あっという間に危険なレベルにまで体温が上昇するおそれがあります。

地球の平均気温の上昇に伴い、多くの地域で温暖な期間が長引き、熱波は頻度と激しさを増し、これまでは特に対応が不要だった地域でも湿度が高まっています。大事な家族であるペットを暑さから守り、安全を確保するための対策は極めて重要です。

私たちにできること

ペットを熱から守り、安全を確保する

何より重要なこととして、暑い日に車内にペットを放置することは絶対にしないでください。乗用車、トラック、SUVの車内の温度はあっという間に上昇します。例えば、気温20°C前後の日には、わずか10分で車内の温度は32°Cまで上がり、30分もすれば40°Cに達する可能性があります。

気候危機の影響により多くの地域でさらに気温が高くなる中で、このような急激な温度の上昇がどのような事態を引き起こしうるか考えてみてください。気温が35°Cであれば、たった10分で車内の温度は45°Cに達し、30分もすれば54°Cにまで跳ね上がります。

このような高温にさらされれば、動物は臓器に回復不可能な損傷を負い、命を落とすかもしれません。

幸い、高温による影響の中でもこれは何より簡単に回避できます。**車内にペットを放置しなければよいのです。**

当然のことながら、日常的に、そして気温が高い状況では特に、冷たくて清潔な水を飲める状態にしておくことがペットの健康維持には不可欠です。同じように、日光や熱を避けられる風通しのよい居場所を確保してあげることも大切です。木やタープなどの日よけによって風の流れが遮断されないようにできれば理想的ですが、犬小屋のような囲いのある屋外の居場所は、実は熱がこもって事態が悪化する可能性があるので注意してください。

また大半の動物は、高温に対して私たち人間とは異なる反応をする点も留意しておきましょう。動物の体温を急速に下げるのに、扇風機は必ずしも絶大な効果を発揮するわけではありません。一方で、人間と同じくエアコンが効いた涼しい場所ならペットにも効果的です。

ペットに熱ストレスに関連した症状が表れた場合には（16ページ冒頭の囲み記事を参照）、冷たい濡れタオルでくるむ、タオルを巻いた氷嚢を身体にあてる、冷水をかけるなど、身体を速やかに冷やすための処置を行いましょう。

熱ストレスの症状が5分ほど経っても落ち着きはじめない、あるいは悪化する場合には、直ちに受診する必要があります。

高温・多湿の環境により、動物に熱ストレスが生じる可能性があるのは、私たち人間と同じです。動物における**熱ストレス**の症状としては、過度なパンティング、呼吸困難、過剰な水分摂取、嘔吐、下痢、体力減退、いつもと違う行動や攻撃的な行動、意識消失、発作などがあります。極めて深刻な場合だと、人間と同じように動物も熱ストレスによって死亡する可能性があります。

あらかじめ計画を立てる

極端な気象現象や気候変動に関連する自然災害は、一見どこからともなく突然やってくるように思われます。しかし、ペットがつらい経験をしないように、そのような事象の前後にできることは多々あります。

米国疾病予防管理センター（CDC）は、ペット用の避難グッズを常時用意しておくことを推奨しています。そうすれば、災害発生時や避難命令が出た後に慌てて飼い主やペットの安全が脅かされることなく、ペットにとって緊急時に必要な対応を直ちに取ることができます。

またCDCは、「避難グッズを用意する際に入れるものとして、ペットにとって最低限必要なもの、薬、書類を検討すること」とし、以下を推奨しています。

- ハーネス、リード、鑑札の付いた首輪
- ペットの大きさに合ったキャリーバッグ（寝床とおもちゃも入れておく）
- 2週間分の十分な量のえさと水、薬（防水の容器・缶に入れて密閉する）
- ポリ袋と排泄物の処理・清掃用具
- かかりつけの動物病院の記録、登録情報、マイクロチップ情報のコピーなど重要書類
- 最近撮影したペットの写真
- ペット用の救急キット

自然災害発生時および発生後にペットの安全と健康を維持するためにできる最善の対策は、あらかじめ計画を立てておくことです。その方法の詳細については、以下に紹介する**米国動物愛護協会**の緊急災害対策に関する推奨事項をご確認ください。

米国動物愛護協会（HSUS）は、保護施設、獣医学プログラム、緊急避難所、レスキューなどを通して、他のどの動物福祉団体よりも多い年間10万を超える動物に直接的なケアを提供しています。またHSUSは、研修・トレーニングを通じて動物の福祉を守る活動もしています。

HSUSは、自然災害発生時にペットの安全を確保するために、いくつかの予防措置を取っておくことを飼い主に提案しています。

- ペットの登録情報が更新されていることを確認してください。
  - ペットには首輪とタグを付けておきましょう。動物救護スタッフでない人がペットを見つけてくれた場合に大事な情報となります。タグには、飼い主の携帯電話番号を忘れずに記載しておきましょう。
  - マイクロチップを装着し、飼い主の名前で登録されていることを確認しておきましょう。
- 避難命令が出た場合（あるいは自分で避難することを決断した場合）は、必ずペットを連れてできるだけ早く避難してください。
- 緊急避難所や宿泊施設はペット同伴では利用できないことを想定しておきましょう。
  - 自治体の緊急事態管理担当者に問い合わせをし、ペット同伴で利用可能な避難所があるか確認しておきましょう。
- 近隣地域からの避難が必要な場合は、避難先の宿泊施設にペットの受け入れが可能かどうか確認してください。
  - 受け入れ可能な頭数、体重・サイズ、種の制限について問い合わせましょう。

ペットを連れて避難できない場合には、以下を検討してください。

- 一時的に預かってくれる友人や親せきに相談する。
- 災害時に避難所を提供してくれる厩舎や動物病院を利用する。
- 地元の動物救護施設が提供する緊急時の一時預かりサービスやペット用の避難所を探す。

気象災害の後には

気候変動に伴う極端な気象現象が起きた後には、人間と同じく、ペットにとっていつもの場所がいつもと違うように感じられます。動物によっては、人間よりも強くそう感じる場合があることを覚えておきましょう。ほんの一例として、犬は鋭い嗅覚を頼りに進むべき方向を決めていることが広く知られています。洪水のような自然災害の後には、馴染みのあるにおいがあった場所が全く知らない場所に感じられ、方向感覚を失ってしまう可能性があります。

そのため、瓦礫など身体にとって危険なものが落ちている可能性も踏まえ、ペットを放さないようにするのが最善です。外では、犬にはリードを付け、猫やその他の小動物はキャリーバッグに入れておくとよいでしょう。予想外に野生動物に出くわす可能性もあるので注意が必要です。自宅や庭、近くの公園やその周辺に、逃げ場を求めてやってきているかもしれません。

新しく変わってしまった周辺環境にペットが慣れるまで気長に待つことも大切です。

HSUSは、「できるだけ早く普段の生活に戻れるようにし、環境の変化に伴うストレスによる問題行動に備えましょう。問題行動が続く、あるいは何らかの健康上の問題があると思われる場合は、獣医に相談する」よう推奨しています。

「百の治療より一の予防（An ounce of prevention is worth a pound of cure.）」ということわざがあります。

最悪の事態を避けるために予防措置を取っておくことは、極端な気象現象が起きた後で負ったダメージやケガを修復するよりはるかに簡単で効果的です。災害が起きる前に獣医や自治体の緊急災害対策担当者に相談をしておけば、緊急時にペットに可能な限り最善のケアを受けさせられるという安心につながります。

次のステップ

大事なのは、気候変動は私たち人間が住む世界に影響を及ぼすだけではなく、猫や犬、カメなど、共に生きる最愛の動物たちの世界や健康にも影響を及ぼすのです。

そして言うまでもなく、自然災害や危険な熱波は避けられません。気温上昇が進む世界ではなおさらで気が滅入りますが、これは母なる自然の働きです。

たとえ今すぐに炭素汚染の排出を完全に止めたとしても、この先相当な期間にわたり気候変動の影響が続くことも事実です。私たちが今直面している危機を引き起こした汚染は、非常に長い間大気中にとどまり続けるのです。

しかし、今すぐに気候変動の進行を止められないとしても、化石燃料を排除し、最悪の事態を避けるために大胆かつ断固たる行動を起こすことはできます。私たち自身のためだけではなく、家族の一員であるペットのために。そして、この先もペットと人が一緒に暮らしていくために。

そのために、緊急の気候アクションが必要なのです。政治やビジネス、生活のあらゆる局面で。あらゆる場面において。

さあ、共に行動しましょう。

The Climate Reality Project®
JAPAN

クライメート・リアリティ・プロジェクト(The Climate Reality Project/略:CRP)は気候変動対策に取り組む世界的なイニシアティブです。2006年に始動してから、気候変動とその解決策に対する人々の意識を高め、正しい情報を伝えています。

特に、気候変動に関するトレーニングを通じて「クライメート・リアリティ・リーダー」(ボランティア)を養成し、力を結集させるための活動をしています。
世界中のリーダーのコミュニティは、190か国に住む合計4万人以上に上ります。

詳細については、下記のホームページをご覧ください。
ホームページ：www.climaterealityjapan.org

ご不明な点がございましたら、下記のメールアドレスにお申し出ください。
メールアドレス：japan@climatereality.com